

報告

ゼロ・ビギナーに対する日本語ボランティアの意識調査 ー地域日本語教室向けのビギナー教材の開発にあたってー

Survey on the Attitude of Japanese Language Volunteers teaching Absolute Beginners

国際言語文化アカデミア外国籍県民支援事業担当部会¹

Foreign Residents Support Group of ILCS

0. はじめに

国際言語文化アカデミア外国籍県民支援事業担当部会では、平成 27 年度から3年計画の研究プロジェクトとして「地域日本語教室で使いやすいビギナー教材の研究開発」に取り組んでいる。本年度はプロジェクト実施初年度として、「どんなビギナー教材の開発に着手するか」を明らかにするため、県内6地域²で活動する日本語ボランティアを対象に、ビギナーのうちでも対応が困難とされる「ゼロ・ビギナー」³への初期対応と教材についての意識調査を実施した。本稿では、本研究プロジェクト取り組みの動機を述べ、本年度実施した調査研究の概要と実施について報告する。

1. 問題の所在

まず最初に、研究プロジェクト「地域日本語教室で使いやすいビギナー教材の研究開発」に取り組むことになった経緯と、テーマ選定の理由を述べる。

国際言語文化アカデミア外国籍県民支援事業担当部会では、外国籍県民対象の日本語講座に加え、外国籍県民を支援する県民や行政機関などへの支援を通し、外国籍県民が暮しやすい環境づくりを目指して事業を展開している。特に日本語ボランティアの育成及び諸団体の活動支援を、生活者としての外国籍県民を支える環境づくりにつながる最重要事項の一つとして捉え、各種講座⁴の企画と実施に加え、日本語ボランティア同士のネットワーキングと問題意識の共有を目的とした場の提供⁵の実践を通して、より現場のニーズに適した支援が可能になるよう努めている。

国際言語文化アカデミア(以下、アカデミア)の設置時に、初めて日本語学習をする者、とりわけゼロ・ビギナーへの対応は専門家の役割だと位置づけられたため、アカデミアでは開所当初からゼロ・ビギナーを対象とする講座を開催してきた。外国籍県民への適応支援、および地域日本語教室の負担軽減を意図したものである。しかしながら、受講者は定員に満たず、毎年開催時期や参加要件等を変えても、効果がないまま3年を経過した。定員割れの主因は立地ではないかという指摘があり、平成27年度はゼロ・ビギナーでも参加可能な講座は出前講座⁶に限定し、アカデミアで開講する講座は休止した。しかし、それではゼロ・ビギナーが地域日本語教室にかける負担が軽減されることにはならない。ゼロ・ビギナー

に対応する際の日本語ボランティアの不安やとまどいは、すでに私たち講師がしばしば耳にするところであった。アカデミアとしてそれらの声に応えるべく、実現可能な新たな支援の形を模索することとなり、意見のすり合わせをしたところ、ゼロ・ビギナーを含むビギナー向けの教材の開発と提供がゼロ・ビギナー対象講座の休止を埋める有効な手段であろうという結論を得た。そこで「地域日本語教室で使いやすいビギナー教材」をテーマに据え、本研究プロジェクトに取り組むことになったのである。

2. 調査概要

実際の教材開発に先立ち、現場ニーズの具体的な調査が必要だと考えた私たちは、神奈川県内で活動をしている日本語ボランティアを対象に聞き取りによる調査を計画した。そして、平成 27 年7月から10月にかけて、4名の部会講師が手分けをしてインタビューを実施し、回答を回収した。下の【表1】を参照されたいが、質問構成は、①半構造化質問項目(1)～(4)、②非構造化質問項目(5) からなり、聞き取り後に(1)～(4)のまとめ、(5)の整理とメタ分析の手順で分析を実施した。

【表1】 調査概要

調査テーマ	ゼロ・ビギナーへの初期対応と教材についての意識調査
調査期間	平成 27 年7月～10月
調査内容	ゼロ・ビギナーへの初期対応と教材についての意識調査
調査目的	日本語ボランティアのゼロ・ビギナー対応に対する不安やとまどいを軽減し、地域教室で使いやすい入門教材の開発にあたって、その意識や具体的なニーズを明らかにする。
調査対象	神奈川県内の地域日本語教室で日本語ボランティアに携わっている者
調査方法	質問紙を使った半構造化インタビュー
質問構成	(1) 調査協力者属性(活動地域、経験年数) (2) 所属団体の対応や学習スタイル(学習形態、教材など) (3) 所属団体のゼロ・ビギナーへの対応 (4) ゼロ・ビギナーへの対応経験 (5) ゼロ・ビギナーへの初期対応に、どんな教材がほしいと思うか。
備考	(1)～(4) 半構造化質問 (簡易集計) (5) 非構造化質問 (メタ分析)

3. 報告

(1) 調査協力者属性

調査協力者の属性を活動地域と経験年数について【表2】、【表3】にまとめた。n=35

【表2】 調査協力者の属性(1)活動地域

地域	横浜	川崎	横須賀・三浦	県央	湘南	県西
調査協力者(名)	14	2	7	6	4	2

【表3】 調査協力者の属性(2)経験年数の分布

活動年数	1年未満	1～5年	6～10年	10～20年	20年以上
調査協力者(名)	1	11	10	7	6

調査対象とする、神奈川県内の地域日本語教室でボランティアとして日本語支援に携わる者(以下、調査協力者)は、県内6地域をカバーするかたちで、当初 30 名を計画した。実際には 35 名の方に調査協力者としてご協力をいただき、地域的に若干の濃淡はあるものの、県全域をカバーすることができた。

調査協力者については、本調査の目的が、教材作成のために個別の日本語ボランティアの問題意識、および団体が抱える困難やニーズを明らかにすることであり、量的調査による統計的判断をするものではないことに留意して、依頼する対象者を計画段階で大まかに選定した。過去にアカデミア講座を受講するなどして、アカデミア講師とつながりを持った者を候補者として、活動地域を考慮しつつ調査計画を立てた。無作為抽出ではなく、すでにアカデミアと何らかの関係を持っていることで、開発予定のアカデミア教材を利用する可能性が高く、かつ日頃の教室活動に対して改善意欲をもって臨んでいる人々の選定を意図したためである。さらに、日本語ボランティアの多様性を考慮したいと考え、できるだけ様々な段階の経験者への聞き取りを試みたのだが、10月末の段階では、圧倒的にベテランが多くなった。平均活動年数は10年3ヶ月におよび、5年以上の経験を有する人が7割近い結果となった。

(2) 所属教室の対応や学習スタイル

ひとりひとりの日本語ボランティアの意識に関する質問に入る前に、各々が所属する日本語教室の活動形態について、4つの問を選択式の小さな複数の質問に分け、回答を求めた。これらは、今回の調査の核心となる質問(5)の「ゼロ・ビギナーへの初期対応に、どんな教材がほしいと思うか」に至るアイスブレーキングの役割と、(5)の回答を解釈する際の参考情報の収集という役割とを兼ねている。

【表4】 所属教室の対応や学習スタイル n=35

①一人の日本語ボランティアが対応する学習者数							
選択した人数区分	1人のみ	2～3人のみ	4人以上のみ	1人および2～3人	1人および4人	2～3人および4人以上	すべて
調査協力者 (名)	4	7	4	13	1	2	4

まず、「①1人の日本語ボランティアが何人の学習者に対応するか」(【表4】)については、「その日によって違う」といって複数回答をする者が多かった。担当予定の日本語ボランティアが欠席したり、新しい学習者が来室したり、あるいはいつもの学習者が欠席するなどのことで、1人の日本語ボランティアが対応する人数に増減が生じる。そういうことが地域の教室では日常的だといわれているが、調査結果にもそれがよくあらわれている。4人以上のみと答えた者はわずか4名に留まったことから、大半の教室は1人の日本語ボランティアがマンツーマン、ないしは2～3人を対象にして日本語支援を行っていることがわかる。

2つ目の問は「②学習者と日本語ボランティアのマッチングが固定的かどうか」である。教室の半数以上は誰が誰の対応をするのか、という点では固定的であったが、数週単位から、1ヶ月単位、長い場合は半年単位で担当する日本語ボランティアを変更する教室もあることが分かった。ただし、地域の教室の場合、学習者が欠席したり、断りなく辞めたりすることも多く、必ずしも長期的に通室するとは限らないため、こうしたルールもゆるやかに適用される場合が多いようだ。そのような状況は、「なるべく同じペア

になるように」、「配慮しつつ、できれば固定」、「最高で3回ぐらい(固定)」、「ずっと来たら再マッチングもあり」などの回答から窺えた。

次の「③初級学習者向けにどのような教材や学習リソースを活用しているか」の質問に対しては、初級学習者に対しては半数以上の19名が教室で指定された教科書を使っていると回答している。教室で指定されている教材は、『みんなの日本語』が最も多いが、他の教科書や副教材を適宜併用する者も2割程度みられる。また、活動がテキスト準拠ではあるとはいえ、自由会話等も行うという回答が16名からあり、テキストのみ使用という13名をやや上回った。加えて日本語能力試験等の試験準備を扱う者も10名にのぼった。

4つ目に「④生活相談の有無」を尋ねた。日本語学習と並行して生活相談への対応をするとの回答は20名であった。「慣れると自然に相談が出てくる。そのときは個人的に残ってもらおう。」という発言があり、地域日本語教室らしい相談対応の様子が窺われる。

(3) 所属教室の「ゼロ・ビギナー」への対応

続いて、日本語既習歴のない学習者、すなわち「ゼロ・ビギナー」への対応を、①最初の来室(初回)と、②2回目以降に分けて、質問した。

ほとんどの教室で、最初に来室した際に入会手続きとレベルチェックを兼ねた面接を行い、名前、国籍、現住所、連絡先などを聞いている。学習の費用や教室規則など、教室に関する説明まで行う教室も少なくない。こうした業務はベテラン日本語ボランティアないし初級学習者の担当者に委ねられることが多いが、中には所属教室に日本語指導をしないでコーディネートだけをするボランティアがいるという回答や、学習希望者の母語で対応しているという回答、手続き関連だけは多言語で用意があるという回答もあった。その一方で、日本語が話せない人が初回に一人で来ることは稀で、ほとんどが付添や紹介者が同行するから、日本語のわかる付添人などに仲介を依頼しているという回答もみられた。

上記のような入会手続きを終えた後の初日は、ゼロ・ビギナーに限らず初級学習者の指導経験を持つ日本語ボランティアの中から、その日の状況によって対応者が決められる。受付対応を除けば、初めて教室に来たゼロ・ビギナーのために専門の担当者が決まっているとの回答は1名のみであったのに対し、ゼロ・ビギナー用の初回教材が教室で準備されているとの回答は半数近くあった。

入会后、2回目以降の担当者については、日本語ボランティアの経験や要望に配慮して決められる教室が多いが、その時々により対応が異なるとした回答も7名ほどあった。このあたりは教室の規模にもよるものと考えられる。

(4)「ゼロ・ビギナー」への対応経験

本調査協力者35名のうち29名、80%以上にゼロ・ビギナーへの対応経験があった。対応経験がない人の理由には「(レベル別に対応する教室で自分が)入門期担当になってから、まだ(対象者が)来ていない」あるいは「ベテランのボランティアさんが対応してくれるので、まだしたことがない」(2名)、「教室システム上、媒介語(ママ)がまったくいない人は来られない」というものが上がった。

対応経験があると答えた29名のうち、対応に慣れているかどうかについては、19名が慣れていると答

えた。さらに対応に困るかという質問には、「困る」18名、「困らない」17名で、ほぼ半々に分かれた。さらに、経験もあり慣れてもいるが困ると答えた人が8名に上り、ゼロ・ビギナー対応は、経験を積み対応に慣れても、特有の問題が解消されにくいことがわかる。

しかし、「困る」と答えても、ゼロ・ビギナーを担当したくないと答えた人はわずか1名、しかも未経験者であった。積極的に担当したい人は20名、他に受ける人がいなければ担当する人が15名(複数回答1名)に上った。積極的に担当すると答えた人の理由から、多いものをあげると、①「お金がないけど学びたいという人こそ受け入れたい」、「外国人の地域での孤立をさげなくてはいけない」など社会的な要請への対応 5名 ②「少しずつ話せるようになる様子を見るのが楽しい」、「目に見えて上手になるのがわかり、それに伴い表情が変わっていくのが嬉しい」など日本語習得の進展を見る楽しみ 4名 ③「できるだけ早く不安を取り除いてあげたい」、「自分が外国で同じ経験をしたから」など学習者の心情への配慮 3名であった。

同様に、「他に受ける人がいなければ担当する」という消極的な受入れを選んだ人の場合は、①「(団体なので個人の)要望はいわない」など教室の事情 5名 ②特に理由はない 3名 ③「学習者の国ごとに用意する物が変わるので大変」、「媒介語なしは大変」などゼロ・ビギナーであるがための手間 3名 ④「経験がないから」など自分の力不足 3名であった。

ゼロ・ビギナーを受け入れる場合の積極的な理由からは、教室としての社会的な役割の自覚が見られるとともに、ボランティア個人としてもゼロ・ビギナーの対応に特別なやりがいを感じていることが窺われる。一方、消極的な場合は、「特に理由はない」も含め、学習者のえり好みをしないうルールに従う姿勢が現れている。それと同時に、ゼロ・ビギナー対応には手間がかかり困難だという気持ちの人も存在していることがわかる。ボランティア個人としては、やりがいと手間との比較によって、そのとき担当したいかどうかの気持ちが決まるとしても、現実には教室という団体の意向が優先されているのではないだろうか。

(5) 日本語ボランティアがゼロ・ビギナーへの初期対応に望む教材

最後に、ゼロ・ビギナー対応のために望む教材について質問し、自由に答えてもらった。日本語ボランティアの回答は、調査者(部会講師)がメモをする形で収集し、個別の調査データを一覧にした。一覧化した調査データは、グラウンデッド・セオリー・アプローチの手法を援用し、情報の切片化を図ったうえで、調査協力者の言説が変容することのない最小の単位に分け、再度一覧化して、重複する情報をまとめたうえで、最終的な分析として解釈と考察を行った。ここでは、紙面の都合上、分析の結果のみを記述する。(【表5】)

【表5】ゼロ・ビギナーへの初期対応に、どんな教材がほしいと思うか。	
入会時受入手続き	入会時の受け入れ手続き用シート *特にニーズが聞き出せるもの *多言語教材の要望もあり
入門期用	あいさつ 自己紹介 など *絵を見て進められるもの *一つずつ、トピックで扱えるような教材
	文字教材

	*意味のあるやりとりとつながられる教材
視 覚 教 材	イラスト、図、写真、まんが

4. 考察

地域日本語教室では、すでに絵カード等が使用され、調査協力者の中にはゼロ・ビギナーへの対応についてある程度そのノウハウが固定化できている人も多く、「ゼロ・ビギナーへの初期対応に、どんな教材がほしいと思うか」という問いに、「特に思い当たらない」という回答も4名あった。しかし活動しづらさを感じ、よりよい方法を求める人が大きく上回っており、具体的な回答からはゼロ・ビギナーをふくむビギナー向けの教材のニーズが改めて確認できた。要望は詳細部分では多岐にわたるものの、共通項を整理することで、今後の教材開発に関し、①入会時受入手続き関連 ②入門期向け単発教材と文字教材 ③視覚教材 の3つの切り口を切り出すことができた。

まず、①入会時受入手続き関連のものについては、ゼロ・ビギナーの初回来室時に直面する、意思疎通のための支援としても意義があるといえよう。初日の対応では、名前や連絡先の確認に始まり、団体の活動日や利用料などを含めた諸般の説明や、本人のニーズの把握等までが入会時の手続きの中に含まれる。教室によって、多言語対応を含め、対応者を指定する体力のあるところから、経験の長い日本語ボランティア同士の協力の結果、その時に対応できる人が相手をするというところまで様々だが、入会時の受入れ手続きに役立つものとして、利用できるものへの要望はアカデミアでの教材開発の視点にも組み込みたいと考える。初日の対応はその後の継続に結び付きやすいとの認識を持つ日本語ボランティアの発言もあり、学習者の興味や学びたいことなどを聞き出せるようなツールがほしいという要望には、切実な思いがこもっていることが推測された。

また、②入門期向け単発教材と文字教材については、既存の教科書と関係なく、入門期にすぐに取りかかれるトピックの教材の要望が上げられた。こうした要望の背景には、『みんなの日本語』や『大地初級』などが初級学習者向けに多く用いられていることが関係するとみられる。前述の2種類の教科書は、いずれも文法積み上げ型シラバスで学校型の日本語教育に対応する内容で編集されており、1週間に1～2時間程度の学習で進む地域日本語教室にとって最善の選択とは言い難いことは、すでに多くの日本語教育専門家の間で指摘されてきた。日本語学習に時間が取れない生活者であっても、役に立つ実感とともに、なじみやすく、一層日本語への関心が高まるように支えるには、教科書のシラバスに縛られない単発的な教材が有効である。地域日本語教室の日本語ボランティアがすでにこれに気づき、改善への模索をしていることに、専門家として刺激を受けた。入門期の「文字教材」として「意味のあるやりとりとつながった文字教材」が必要だという声にも既存のものへの不満がにじみ出ている。

③視覚教材の図、写真、漫画などについては、挨拶、自己紹介をはじめ、コミュニケーション支援に役立つものという観点から、多くの日本語ボランティアが言及している。しかし、図や写真とは、常に「今」を映し出すもので、さほど時を経ないうちに陳腐化することが避けられない。すなわち、こうした教材やリソースへの「与えられたい願望」は、ある意味、終わりが無いニーズと言えるだろう。このニーズに対して「教材」というモノの提供では、実は現実的な解決とはならない。教材開発よりむしろ、アカデミアが企画する講座の提供を通して、自らリソースを発見する、あるいは、多様なツールや情報を使いこなすスキル

をつけるという日本語ボランティアの人材育成に働きかけることが有効であろう。

5. おわりに

この聞き取り調査を実施し、それに対する日本語ボランティアの現場の生の声に触れ、あらためて「ゼロ・ビギナー」の定義や、地域日本語教室で展開されている活動の意義を見直すなど、貴重な視座を得た。教材の使いやすさといった具体的な部分でも多くのヒントをいただいた。さらに調査協力者の発言からは「難しいと思わせない」、「簡易版でコンパクトな形」、「入門期用にそぎ落として」、「複雑すぎる(からよくない)」などのように、教えることへの抑制(欲張らないこと)を示唆するもの、あるいは、「次も教室に来たいと思えるようなもの」、「今日来てよかったと思える」、「入門期でも楽しいと思える」などのように、教室活動の楽しさを指向する言葉がしばしば聞き取れた。これらも教材作成の上で、大きな方向性を与える言葉である。

すべての質問項目を終了した後、調査協力者おひとりおひとりに本研究プロジェクトへの協力の可否を尋ねた。教材を作成する上で、可能な限り現場からのフィードバックを受けたいと考えたからである。幸いなことに28名の方から協力するとのお返事をいただくことができた。しかも13名の方は所属団体にも紹介の労をとってくださるとのことである。

今後、アカデミアの私たちとしては、この調査結果を参考にしつつ、教材作成に向かうことになる。要望としてあげられたことのすべてに対応することは困難だが、できるものから教材として具体化し、できるだけ早い時期に現場に提供して、ご意見を聞き、修正を施した上で、アカデミアHPにアップしていきたいと考えている。

改めて、本調査にご協力くださった日本語教室の方々、また今後も協力の意向を伝えてくださった方々に深謝申し上げて、小稿を閉じることにする。

参考文献

(ホームページはいずれも2015年12月7日閲覧)

神奈川県ホームページ、「神奈川県の市町村」<http://www.pref.kanagawa.jp/cnt/f530001/p780102.html>

横浜市統計ポータルサイト <http://www.city.yokohama.lg.jp/ex/stat/jinko/non-jp/new-j.html>

1 坂内泰子、梅田玲子、小島佳子、村上まさみの4名が所属する。

2 県内地域別6地区とは、横浜地区、川崎地区、横須賀三浦地区、県央地区、湘南地区、県西地区のこと。神奈川県として用いている地域区分である。神奈川県HP参照。

3 ここでいう「ゼロ・ビギナー」は、「地域日本語教室来訪時、日本語でのやり取りがほとんど成立せず、日本語ボランティア側から既習歴がほとんどないだろうと判断された初級日本語学習者」と定義する。だが、生活者としての外国人には日本で長く暮らすうち、断片的な日本語表現をわずかに理解するが、学習したことはないという者も少なくなく、ゼロ・ビギナーの語が地域日本語教室などで用いられる場合は

多少のゆれがある。

- 4 各種講座には、オンデマンド型の出前講座が含まれる。通常の講座内容の出前に加え、団体研修等の場合、内容も当該団体向けに特化される。
- 5 「日本語ボランティア同士のネットワーキングと問題意識の共有を目的とした場」として提供する定例企画として、「アカデミア日本語クラブ」（「日本語ボランティア入門講座」等修了者対象、月次開催）および「集まれ日本語ボランティア」（全地域の日本語ボランティア対象、年2回開催）がある。
- 6 現在は、行政機関等の求めに対応する形で、初めて日本語を学ぶ人のための日本語講座を実施している。